

私のコロナ時代体験記 2

野口幹夫

昨日いつもお世話になっている近所の<M>内科クリニックに行ったのです。高血圧で毎日飲んでいる降圧剤の2ヶ月分がそろそろなくなってきたので、もらいに行ったのです。5時半にいつも通り予約を入れていったのですが、まず医院の前の駐車場が空っぽ。異様です。いつもは隙間を探して入れるのです。入り口に張り紙で「熱のある患者はここに入らないで、電話をください」とありました。おやおやです。

自分は熱もないし平気と思って入ったら、いつも人が溢れている待合室に誰もいません。受付で額に検温器が当てられました。聞いたら36度6分だそうで、私の平熱は36度を割るくらいですから「おや高いですね」と聞いたら「棒検温器より高めに出来ますが、問題ありません。」という、当然でしょう。

この医院はいつも押し寄せる患者を捌くために、診察室を2つ作り、一人だけの<I>先生は、あっちに行ったりこっちを見たり、目まぐるしく動きまわるのです。今日はすぐその一つに入れられ落ち着いた様子の先生と向き合います。普通は血圧を測ってすぐいつもの処方箋を書いてくれて終わりです。

しかし今日は違いました、何か変化はないかと繰り返し聞かれるので、半分冗談で、夜頻尿で困っていますといったら、そこから始まりました。「最近膀胱炎の患者さんが増えているし、お年だから前立腺肥大も検査しましょう」といわれて、すぐ2回の検査室のベッドに寝かされ、膀胱から始まって全部の内臓の超音波検査です。採尿もされ、再び残尿測定。血液検査の採血と30分で帰る予定がなんと1時間半かかってしまいました。その間診察室の前の処置室では看護師さんが3人何することもなくおしゃべりでした。

でもこの思いがけないことは、私にはありがたいことでした。いつか泌尿器科に行くべきところを、思いがけずこの内科さんで全部カバーしてくれたのです。結局、前立腺肥大を防止する薬を、いつの降圧剤にプラスして処方してくださいだったので。いつも行く薬局は、この薬は常置してないので、翌日取りに行きました。めずらしい処方箋で薬局も困ったのでした。

今コロナと格闘しておられる病院の医師・看護師・検査員の方々は、日夜大変

苦勞されていると伺っています。しかし町では、そのせいで、ぽっかり空白になっている医療機関ができています。こんな単純なことを処理する医療行政は不在なのではないでしょうか